早良組だより

お説教と落語

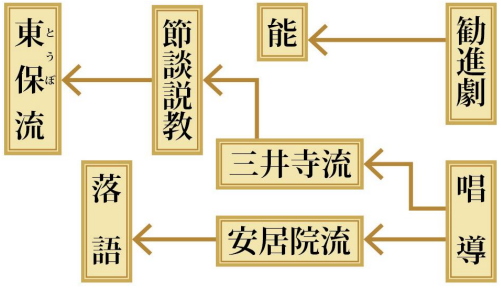
お説教とは、阿弥陀様のお救いを讃嘆することです。この身が阿弥陀様のお慈悲の中にあることを、いや私に阿弥陀様が満ちていてくださっていることを聞かせてもらうのです。

浄土真宗が栄えたのは、このお説教が盛んだったからとお聞きします。それは講義のような難しい話ではなく、人々の情に訴える物語のようなお話でした。時代に即応しながら、いかに阿弥陀様のお救いを伝えることができるかと昔の説教師は苦労されたようです。

〝昔の説教を現代の寺院で行われている「法話」から連想したら大間違いである。興味深い譬喩因縁談（たとえ話）を交えながら、仏教の経典や教義をおもしろ・おかしく説く「説教」は、昔の日本人にとってゆりかごの歌のようなものであった。〟と話芸研究者・関山和夫氏は言います。娯楽のない時代、人々はお寺に足を運び、その研ぎ澄まされた「お説教」を聞き、阿弥陀様のお救いをよろこばれたのですね。

日本に残る様々な話芸は、仏教と密接に関係し発展してきました。「話芸」だけではありません。様々な伝統芸能は仏教を抜きにしては語れないのです。そこで今回の早良組だよりでは、落語をはじめとした「話芸」の源流に迫ってみたいと思います。

話芸の流れ



早良組蝋燭講140周年

講師／内藤昭文師（本願寺派司教 大分教区下毛中組法行寺 住職）

期日／平成30年5月13日（日）　開式／13時30分　会所／小田部 教善寺

「早良組蝋燭講」は、世の中が混沌とした明治維新の時代に、早良郡内の御同行が「親様の御前に報謝の一灯なりとも捧げたい」との念願をもって、明治11年7月に創設されました。翌年には本願寺に申請して許可されています。

その当時、講員一人につき二厘宛て報謝のもとに、筑前名産の甘木蝋燭を手にして徒歩で京都の本願寺へお供えに行かれたそうです。この事が明如上人（本願寺第21代門主）の御心に留まり、明治14年5月24日に、早良組蝋燭講に対し御消息（お手紙）が下付されました。

以来毎月13日に、早良組内の御法中（僧侶）の御出勤を仰ぎ、お勤めされています。また、毎年春秋の2回（3月13日と9月13日）は浄土三部経を拝読しております。（早良組ホームページより）

今までにどれだけの御同行が蝋燭講にお参りされたことでしょうか。この度、おかげさまで140周年を迎えることとなりました。ご一緒にお念仏のご縁にあわせていただきましょう。

平成29年度 早良組子ども報恩講 サバイバルご飯

平成29年12月26日 脇山の万徳寺にて

参加者・こども47名、大人20数名（万徳寺仏教婦人会のご協力もいただきました）

朝10時に開会、献花と献灯をして「らいはいのうた」をお勤めしました。万徳寺ご住職のご法話を聞いてから、サバイバルご飯の準備に取り組みました。

持ってくるものは「アルミ缶2つ」「牛乳パック」で、缶の1つは「かまど」もう1つは「炊飯鍋」になります。若院会やスタッフの皆さんがアルミ缶の加工をしてくださり、子どもたちは燃料の牛乳パックを約30分燃やし続けます。

低学年の参加者が多かったのもあり、火が消えたり、倒れてこぼしてしまったり…。

でも自分で炊いたご飯は美味しかった！うまくできなかった子どもたちにも万徳寺仏教婦人会のご協力で、美味しいカレーライスをご用意頂きました。

小さな子には難しかったようですが、ご飯ができる有り難さや自分にもご飯が炊けるよろこびを感じてもらえたと思います。

早良組からのお知らせ

報恩講スタンプラリー

「報恩講スタンプラリー」を始めて、今年で２年目の開催となりました。今年も沢山の方が、各寺の報恩講のご縁に遇っていただき、いつもより賑やかな報恩講となりました。

ご案内の通り、10ヶ寺以上お参りされた方は、お手次のお寺様までスタンプ台紙をお持ちください。

早良組オリジナル Tシャツ・ポロシャツ

昨年度に引き続き、今年度も早良組Tシャツと、新たにポロシャツを製作しました。

お陰様で多数ご購入いただき、誠にありがとうございました。

この売り上げの一部は熊本地震災害義援金として熊本教区に納めさせていただきました。

浄土真宗本願寺派 福岡教区 早良組　発行／福岡教区早良組 情報啓発部門　事務所／福岡市西区姪浜6-9-34 順光寺内 ☎881-0560　第53号

勧進劇 かんじんげき

かつて、寺院や僧侶や有志の人々は、しばしば「勧進」を行いました。「勧進」というのは、寄付を募ることです。集まった金品で、寺院を建立したり修復したり、あるいは橋を架けたり道を作るなどのインフラ整備を行ったりしました。そして少しでも多くの人々に協力してもらうために、宗教儀礼や説教と共に演劇性の高い催しが公開される。これを「勧進劇」と呼びます。能や狂言はこの「勧進劇」を起源としている側面があります。

能・狂言や謡などの仏教的芸能を積極的に教化へと取り入れられたのは、本願寺第八代門主・蓮如上人です。

本願寺では、毎年5月21日の宗祖降誕会の際に、観世流による祝賀能が演じられています。

唱導 しょうどう

そして、「勧進劇」と共に発展していったのが「唱導（説法、説教、法説、法談、講義など色々な言い方があります）」です。身体性の高い勧進劇などに比べると、言葉へ重心がおかれますが、日本仏教において独特の発展を遂げます。

「唱導」は単に仏法を説くだけではなく、聴衆の情に訴えるような節がつけられるなどの演出が工夫されていきました。

日本ではすでに「聖徳太子が高座において『勝鬘経』や『法華経』を講義した」記録が残っています。その後、平安末期頃から唱導の技法が次第に確立していったようです。

お説教と落語

平安末期から鎌倉時代にかけて、親子二代続いて説教の名手と呼ばれた人たちがいました。澄憲と聖覚の親子です。聖覚は数多い法然聖人の弟子の中でも有名な人で、親鸞聖人がとても尊敬された人物です。この澄憲と聖覚親子によって成立したのが安居院流の唱導です。

澄憲は比叡山で学問を修めた出家者でした。天台宗の大僧都となり、澄憲法印と尊称されました。ところがその後、一条北小路大宮通の安居院に隠居します。そして、結婚して家庭をもち、十人の子供をもうけました。天台の高僧でありながら、一転、世俗の生活を送ったことはかなり非難されたようです。しかし澄憲はその卓越した説教の才能をいかんなく発揮して、世俗の中で見事な説教を語り、民衆を法悦へと導き、堂々と生き抜きました。そしてその子供が聖覚です。父にも優るとも劣らぬ説教の才能をもっており、その上文才にも恵まれていました。

安居院流はその後、様々な方面に影響を与えていきます。後述しますが、落語の祖と呼ばれる安楽庵策伝もこの系統から出てきます。また真宗独自の節付き唱導である「節談説教」もこの安居院流だと言えます。

私たちの日常生活の中にはさまざまな形で仏教が息づいています。生活様式から、思考傾向、死生観、衣食住にいたるまで、知らず知らずのうちに仏教が根付いています。伝統的な芸能においても、仏教を基盤として成立しているものや、仏教の影響を強く受けて展開しているものが大部分なのです。そして落語もそのひとつです。落語はお説教の形態を色濃く残しているとても特別な芸能です。

説教を志すものたちは、寮や塾に入って学んだり、しかるべき師匠に随行しながら、噺家の前座修行と同様に、師匠の荷物を持ったり衣をたたんだりしながら、口調の稽古に励んだそうです。「お前座」といって、師匠の前に一席、喋らせてもらって稽古をする。これが後に落語の「前座」という用語になります。「高座にあがる」というのも、「ええ一席、ご機嫌をうかがいます」というのも説教用語です。

安楽庵策伝 あんらくあんさくでん

日本において様々な話芸が花開くのが江戸時代です。その中で安土桃山時代から江戸時代初期を生き抜いた安楽庵策伝という人物がいます。この策伝こそ落語の祖と呼ばれる人物です。

京都の新京極通りにある浄土宗西山派 誓願寺第五十五世法主だった人物であり、茶道を極め、豊かな文才を発揮し、なみなみならぬ政治手腕をもっていた僧侶でした。

策伝が「落語の祖」と呼ばれた理由として『醒睡笑』という著作を残していることが挙げられます。これは策伝が小僧の頃から長年にわたって蓄積してきた「おかしい話」「味わい深い話」を全八巻にまとめた「お話集」です。

例えば、お寺での説法の際、あまり仏教の教義ばかり聞かされると、ついつい退屈したり、眠くなったりしますね。そこで、少しおもしろおかしい小話を語って、聴衆をリラックスさせる。そして仏法へと話を導いていく。『醒睡笑』というタイトルも「睡眠を醒ます笑い」という意味です。今も昔も変わらぬ光景ですね。

この本に掲載されているものは、どの話も短く、しかもそのジャンルは広範囲にわたります。最後に落ちがつく小話が多く、日本の「落とし話」の形態はこの本によって確立したという説もあります。

またこの『醒睡笑』は落語のタネ本となっただけではなく、江戸時代における説教のタネ本となって広く読まれました。

※落語のネタで浄土真宗に関係する話がいくつかあります
・「宗論」「菊江仏壇」「お文さん」「亀佐」
・「親子茶屋」「お座参り」「浮世根問い」「後生うなぎ」「寿限無」等

節談説教

浄土真宗には「節談説教」という独自のスタイルがあります。「お説教」や「法話」が生命線である浄土真宗は、どうすればお説教を聞いてもらえるかという工夫や技法が発達していきます。浄土真宗では祈祷や修行や戒律といったことはしませんので、語り合い、聴聞し合って、現在の教線を形成してきた仏教なのです。その結実のひとつが高座の上で行われる「節談説教」です。語るがごとく歌うがごとく、話が節になり節が話になって行きます。抑揚をつけ、人の感情に訴えるような表現は節談説教ならではです。

節談特有の七五調の言葉はリズミカルであります。次のような言葉に節がついていたんでしょうね。

・「好いて行くより　好かれて行けば
行こう行かんの世話いらず」

・「永い浮世と思わぬことよ　娑婆はしばしの仮の宿　やがて大悲の親里へ
参る間の身のつとめ」

現在では節談を語れる布教使は、わずかになりましたが、「高座」と共に見直されつつあります。早良組にもまれに節談説教をされるご講師が来られますので、ぜひご縁にあってみてください。

まとめ

日本において、仏教は多くの芸能の起源となりました。普段、意識しないところにも、仏教が根付いていたのだと改めて気づかせてもらいます。我々日本人は仏教と共に生きてきたのです。その話芸の元となったお説教も、時代に即応し続け今に至るのです。変わらないことはただひとつ、阿弥陀さまのお救いが今なお語られていることです。今日もまた阿弥陀さまのお救いのお話が、どこかのご法座でお取り次ぎされていることでしょう。

最後に思想家・柳宗悦氏の言葉を「私がいつも心を惹かれるのは、真宗のお説教である。その説き方と聞き方とである。説く方は多く節で語り、聞く方は南無阿弥陀仏で受け取る。信仰は受容なのである。素直な受取りなのである。その教えを通して、仏の声に耳を傾ければよいのである。それゆえ知識を納得させる説教を聞きにゆくのではなく、有難さを受取りにゆくのである。謂わば、法悦に浸りにゆくのである。」

～参考文献～
関山和夫著『説教の歴史』岩波新書／『落語風俗帳』白水社／『安楽庵策伝』青蛙房　谷口幸璽著『「節談」はよみがえる』白馬社
釈徹宗著『おてらくご』本願寺出版／『落語に花咲く仏教』朝日新聞出版／『露の団姫著『露の団姫の仏教いろは寄席』佼成出版社